

センタージャーナル

〒460-0016
名古屋市中区橘二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター



提供された「満州別院(新京別院)」で撮影された写真。中央に大谷光暢法主(当時)が写る
(写真の無断転用はご遠慮下さい。)

立つ!
いのちの大地に
聞く!
いのちの叫びを

真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・ 講義抄録 真宗儀式の教相 ②・③
- ・ 研究生現地研修 私にとって真宗本廟とは ④・⑤
- ・ 大谷派の近現代史 「満州開教」と「満州別院」 ⑥
- ・ 差別と私② 職員研修会 ⑦
- ・ INFORMATION ⑧

◆イラストカット集(※寺報などにご利用ください)

広く浄土の門を開く

先般、真宗教化センター設置に向けた協議会のため、東京の真宗会館を訪れた。日本の人口のおよそ三分の一が首都圏に集中する中、先祖が聞いてきたお念仏の教えをどのように伝えるのか。首都圏教化の最前線での地道な取り組みを伺う中で、一人の悲しみに寄り添うところに教えが受け渡されたとご教示いただいた。

二〇一三年を振りかえれば、今年四〇〇回忌を迎えた教如上人も、戦国乱世に身を置く中で、「本願寺の家は慈悲を以って本とす」と、常に一切衆生が平等に済すまれる場としての本願寺を追及されたという。「教如上人は、門徒衆と生活を共にした経験の中から、親鸞聖人の非僧非俗の生き方を体現されたのだろう」と、別院報恩講の讃仰講演会において、大桑斉氏よりご教授いただいた。

大谷派が教団として最も大規模に華々しく開教したのは、明治から昭和初期の近代だろう。上載の写真は、21組竹雲院のご門徒である久野明久氏より提供いただいた写真である。立派な本堂を構え、国と教団の威信をかけた開教事業によっても、この地にお念

仏の教えは残らなかった。この地に住むものの悲しみの声を聞かずして、お念仏の声は響かないことを物語っているのだろう。

当時、「満州開教総督」を勤めた宮谷法含氏は、戦後、『宗門白書』によって「宗門は今や厳粛な懺悔に基づく自己批判から再出発すべき関頭にきている」と全宗門に告げ、後に真宗同朋会運動が展開された。その運動の中で育まれた恩恵を感じつつも、未だに自己批判できぬ我が身の愚かさが気になる。

奇しくも年末に駆け込みで法制化された特定秘密保護法の行く末に、「満州開教」にまつわる一枚の写真が重なって見える。宗祖が開かれた浄土の門を教如上人の如く開き続けることができるのか。景気回復の幻想霧の中に自己の立つべき寄る辺を見失わないよう、宗祖の教えに確かめねばなるまい。

来年も何卒、ご指導賜りますようよろしくお願い申し上げます。

(主幹 荒山 淳)

講義抄録

2013年9月25日

〈研究生「教化研修」〉
「真宗儀式の教相」

竹橋 太氏
（本願部出仕）

第12回



教団問題

今日は最初に、十月に御正当法要が行われる教如上人の東西分立について話をしたいと思います。さらに前提として、同朋会運動と教団問題に触れたいと思います。

今、皆さんがこうしてセンターで学んでいることもそうですが、教団がすることとは何一つ、同朋会運動でないものはないのです。要するに、真宗の教えが広まる、ひろめる、自分が出遇う、そういうこと以外には教団の活動はないのです。それを、真宗同朋会運動と名付けたわけです。その展開の中で、教団問題が起ったのです。

教団問題の一面には、確かに一面と言わなければなりません。大谷家のお家騒動ということがありました。昭和四十四年に「開申」が出されます。「開申」とは、真宗大谷派の代表役員である管長が出す文書のことです。「宗派の管長職を長男に譲る」という内容でした。住職は自分が続ける、ということ。これは当時の宗憲に合いません。はっきりとはしませんが、住職を管長とは別の方に継がせたために行ったことであつたよ



本間北側に奉掛されている教如上人御影
教如上人400回忌御正当法要（2013年10月4日）

うです。教団の近代化という中で、いわゆるお家騒動が起こった、そういうことが教団問題の一面にあるわけです。最終的には宗派と大谷家が和解し、新しい宗憲が作られ、当時の法主が門首になられたわけです。その後、三男である今の門首が就任され、他の兄弟方はすべて宗派を出て行かれたわけです。こういう背景を皆さんに知っておいて頂きたいのです。そういう危機を経つつ、教団は同朋会運動を一貫して行っているわけです。たしかにいろいろなことが起

きています。しかし真宗大谷派とは、皆さん一人ひとりでもあるのです。本山だけが真宗大谷派ではありません。「私」が真宗大谷派です。だから、本山がもめたからといって同朋会運動なんてできない、ということではないのです。

「こうでなくては」ということはありません。どうであつても、どんな者でも救われる。五逆と正法を誹謗する者が、その自覚のもとで救われるのが浄土真宗なのです。一人ひとり、それぞれが真宗の門を開くのです。今の教団はだめだと言うのではなしに、皆さんがそうやって動くことによって、真宗大谷派は成り立つのです。そこにおのずと結果が現れるはず。です。

教如上人の東西分立

さて教如上人のお話ですが、じつはそこにもお家騒動という側面があるので。教如上人のお母さんの如春尼さまは十四歳で嫁いで来て、十五歳で教如上人が生まれます。一方、三男の准如上人は三十歳過ぎてから生まれた子です。おのずと向ける感情が違ったようです。また教如上人は如春尼さまの選んだ奥様を大

事にしなかつたようです。ですから二人の間がうまくいっていません。また、本願寺の家臣団にも対立がありました。頭如上人に従って石山本願寺を退去した側と、教如上人と籠城した側（このとき教如上人は頭如上人に勘当されました）という二つのグループです。もうひとつあるんです。教如上人は豊臣家に仕えた千利休、豊臣秀長（秀吉の弟）のグループに親しんでいました。一方には石田三成の官僚グループがあります。豊臣家の中で権力争いをしていました。大谷家の内紛がそこに見事に重なったのです。教如上人が本願寺住職になる前年、秀長が病気で亡くなると千利休は自殺を強いられます。だからその石田三成方に付いて、如春尼とその息子の准如上人の側が計って、本願寺を継ぐことになるのです。こういうお家騒動という側面があつたのです。後に東本願寺では教如上人の跡継ぎ問題でも、かなり揉めるのです。本願寺の中にはいつも内紛があつたというわけです。真宗大谷派はそういう凡夫の教団なのです。

御真影の後ろに目!?

本山は二堂形式です。二つは別の御堂ではありますが、一つだと思ってください。「阿弥陀堂は奥の院だ」という言い方をされています。御影堂の背景に阿弥陀堂があるということです。

我々は御影堂で親鸞聖人に手を合わせます。親鸞聖人は私たちの方を向いています。我々に教えを説いているのです。ですから「正信偈」をお勤めするということは、親鸞聖人が「正信偈」を説いて

いるのを、我々が聞くという形をもって儀式であらわしているのです。

それは親鸞聖人が、念仏の教えを浄土の側から我々に伝えていくということなのです。ですから親鸞聖人は、我々の方を向いています。しかし、一緒に向こうを向いて、お念仏もしています。実は、親鸞聖人の御真影の後ろにも目がついています。……ごめんない、これは全くの冗談です。

ただ、御真影の親鸞聖人は数珠を繰っている姿をしています。当時は数珠を繰って念仏したのです。つまり、親鸞聖人が「南無阿弥陀仏」と称え、阿弥陀さまの方を向いているということなのです。同時に、そのお念仏が説法なのです。そして、お念仏の表現が、我々に伝えられた「正信偈」なのです。

我々は、どちらを向いているかハッキリさせたいと考えがちですが、両方なのです。だから、親鸞聖人は我々にとって宗祖であり、我々のお同行であると、両方のことが言えるのです。ですから御影堂で親鸞聖人の前に座るといふことは、親鸞聖人とともに御本尊に手を合わせているということです。そうでないと、御影堂というものは親鸞聖人を神様か仏様として祀るような御堂にしなければならないのです。

「行者宿報偈」と宗祖の下山

親鸞聖人は六角堂で夢のお告げをいただきます、法然上人を訪ねたと『御伝鈔』にあります（『真宗聖典』七二五頁）。「あなた人間としてどうしようもなく（宿報にて）、女性と交わりを持たなければ

ならなくなったときには、観音である私が女性となり、そのお相手となりましょう。一生の間あなたと人生をともしして、亡くなる時には極楽に一緒に行きましょう」というものです。「行者宿報偈」「女犯偈」などとも言われて、本当にさまざまな理解があります。しかし、それはこういうことだと思っております。

親鸞聖人は比叡山で『法華経』を学んでいました。『法華経』はこの世を浄土にし、この土にいる仏に出遇うという教えです。親鸞聖人は比叡山で学ばずば学ばず、自分は救われたいと感じたのだと思います。私が聖者にならなくてはならないからです。

しかし、お念仏の教えからいえば、そうならないという凡夫の自覚が、阿弥陀さまに出遇ったということなのです。だから、ここが浄土になるのではなく、ここに浄土がはたらくのです。そこが『法華経』と浄土真宗の教えが一番異なるところなのです。

阿弥陀さまは、我々が「南無阿弥陀仏」と頭を下げない限りどこにもいません。どこかにいる仏様に手を合わせることでよって、煩惱や罪業を自覚するのではありません。そのことを自覚させるはたらくきを、阿弥陀さまというのです。

ということ、その自覚がある時には「南無」しかないのです。私の思いで、私は正しいというところで生きていた。それを慙愧する、自分の思いを全て捨てるという救いがお念仏として、すでに答えとして回向されてあるわけです。「南無・阿弥陀仏」が成り立つということ以外に救いはないのです。

親鸞聖人が山を下りたのは、「こうでなければ」「こうあるべきだ」という自

力の仏教から、「こうであつても」救ってくださるという他力の仏教に、お念仏に出遇われたということだと思えます。お坊さんとして失格だ「けれども」救う、人間としてダメだ「けれども」救う。こういう無条件の救いこそが「行者宿報偈」の意味だと、私は受け取っています。

本尊とは「向うから現われてくる」真実

江戸時代の相伝教学の『稟承餘艸』には、「私たちの安置する阿弥陀如来以外の仏像は凡夫の方から立て安置しているものである。当家の仏像は、あちらのほうからこちらに姿を現わされたのである」とあります。

浄土からこちらに姿を現わしたものが、真宗の本尊だということなのです。つまり、阿弥陀如来は「如」が形として現われたものだ、というわけです。我々は形ある像は真実の借り物、偽物であり、形の無い真如が本物だと考えがちです。こつちが劣つたもの、こつちが優れているもの、と。その時には「如」が、知識として私の中に囲い込まれてしまっているのです。形が無くてわからないから「わからないもの」という一つのものにして理解してしまうのです。

しかし、「如」は認識対象ではないのです。御本尊とは、「如」が形となった「モノ」です。それ以外に「如」は存在しません。形は「如」そのものではありません。如を指し示すものであり、如の自己表現でもあります。

もちろん、御信心と関係ない人からしたら、木像はただの木塊だし、絵像はただの紙です。そういう意味では、儀式

は信心ということをあらわす形であり、自分が凡夫だといって手を合わす手がかり、そのための形なのです。

本尊ははたらきである、だから「モノ」と言ったら劣っているという考え方もあると思います。しかし、そうではありません。「モノ」にまでなつてくださった真実です。儀式として、私たちに頭を下げるという形を作ってください「モノ」なのです。

仏像も、名号も、お寺も、袈裟も、我々が凡夫であることを理解させる手がかりとして、形となつて向うから現われてくださつたのです。逆を言えば、真実はどんな形にも、どんな「モノ」にもなるのです。

向うから現れたものとして、御本尊をいただくことができる、それが浄土真宗の信心によって開かれる無条件の救いの世界なのだ、私は思います。

(文責編集部)

※次回は、二〇一四年四月八日(火) 詳細は八面をご覧ください。



現地研修

2013年10月4日

私にとって真宗本廟とは
「教化センター」研究生の案内による真宗本廟日帰り参拝

去る十月四日、名古屋別院主催「教如上人四百回忌御正当法要参拝」に、教化センター研究生がスタッフとして参加した。

毎月、名古屋別院では「真宗門徒講座」が開かれており、研究生は講師として実践の場に立っている。今回の企画はその一環として、真宗本廟（東本願寺）創立の祖・教如上人の四百回御正当年に際し、ご門徒の方々およびスタッフが積極的に真宗本廟へ足を運ぶ契機となることを願って立案された。

今回参加されたご門徒からは、「同朋会館や諸殿拝観は、はじめて」という方も多く、今まで知らなかった真宗本廟の歴史や先達の願いに触れ、おどろきと喜びの音が聞かれた。スタッフとして参加した研究生が現地では何を感じ、ご門徒の方々とのような交流を持ち、そして何が自身の課題となったのかを報告する。



真宗本廟は静かに私たちを迎えてくれた

当日の行程

7:00	受付(名古屋別院本堂前)	12:00	昼食 (同朋会館にて)
7:30	名古屋別院発 (バス)	13:00	教如上人四百回御正当法要参拝
9:50	真宗本廟着	14:45	諸殿拝観 (研究生が案内)
10:00	同朋会館へ入館	16:30	真宗本廟発 (バス)
10:10	入館式 (勤行、お話)	19:00	名古屋別院着 / 解散
11:00	講義 「真宗本廟とお内仏」		

たくさんの方の声を聞いて

はじめて諸殿拝観の案内役をした。案内をする中で、参加者から「初めてじっくりとみるのができた」「自分の家のお内仏はどうだったかな」などの声を聞き、自分自身も毎日法務をしていながら、お内仏の荘厳をじっくり見ていないことに気づかされた。あらためてじっくり見ると、真宗本廟の建物や荘厳には、細部にわたる一つひとつに先人の願いや思いが込められていた。おそらく自坊やご門徒さんのお内仏の一つひとつにも同じ思いが込められているのだろう。

ひとり静かに参拝するのでもいいが、たくさんのお同行と一緒に参拝すると、同行の声、先人の声、様々な声を聞く楽しみがあることに気づかせてもらった。

(第八期生 石原唯和)

共に集える場

私が真宗本廟へ最初に足を運んだのは得度の時だった。初めて見る両堂の大きさに圧倒されたのが印象に残る。それ以降、何度となく真宗本廟を訪れているが「私にとって真宗本廟とは」と、あらためて問われると曖昧だ。

今回、スタッフとして、はじめて諸殿拝観を担当する機会を得た。様々な経験・思いを持った方々を案内する中で、共に本廟の歴史を感じ、宗祖の願いに想いを寄せる大切な時間を過ごすことができた。真宗本廟は、何の気もななく共に集える場であることを再発見した。

(第八期生 花園盛二)

本願念仏に生きた方々の歴史

このたびの団体参拝で強く感じたのは、お内仏や内陣に置かれる小さなもの一つ一つに、また些細な飾りの端々に作り手の願いや、本願念仏に生きた方々の歴史が込められているということである。

様々な人間関係の中で生きていく私たちもまた、様々な願いや歴史のうえに「今、ここにいるのだということ」を問いかける思いだった。

(第九期生 荒山優)



御影堂の荘厳について説明する研究生



研究生が用意した教如上人クイズを考える参加者



話はずむ昼食



同朋会館の合掌御膳

(第九期生
田島 晶) たじま しょう

参拝を通して
あらたな真宗
本廟に出遇え
た。

真宗本廟に参る時、私はいつも違った新鮮さを感じる。この度の参拝では、事前に歴史などがある程度勉強していたということもあり、新鮮さに加え、親しみを感じることができた。
親鸞聖人をはじめとした念仏者たちの願いが時代を超えて、いつも変わらず生き続けていることの象徴として真宗本廟がそこにある。その不変の願いとしての真宗本廟から、日々変わりゆく私が問われていく。だからこそ、新鮮な気持ちで真宗本廟に参ることができたのだ。
今回の一日

親しみと、新鮮さと

同じ班でもに参拝した門徒の方々の言葉が印象に残っている。「私たちの地元が、本廟再建に関わってきたことを知れてよかったわ」というものや、「本廟はさすがに威厳があるねえ」という発言だ。私自身、地元尾張・三河地方の方々の本廟再建にかけた思いを学び、本廟の堂々とした、たたずまいに触れて、これまでよりも本廟が身近に感じられた。その思いを共有できてうれしかった。その思いを共有できてうれしかった。その思いを共有できてうれしかった。
班の皆さんと「また一緒に本廟に来たいですね」と言葉を交わし、本廟を後にした。実現する日を心待ちにしている。
(第十期生 玉腰 暁広) たまし あきひろ

地元の方々の思いと、真宗本廟の姿



阿弥陀堂の修復現場を見学



同朋会館での入館式

(第十期生 菱川 俊) ひしかわ しゅん

門徒さんと一緒にお参りをしたのは初めてだった。このたびの参拝で、お参りをしている全員が手を合わせている姿を見ながら、何かを祈るわけでもなく、ただただ自然と手が合わさっている光景が一番印象に残った。親鸞聖人が伝えてくださった本願念仏の教えが、現代を生き続けている私たちまで伝わっていることへの感謝の気持ちが自然と念仏で表され、その姿を通して後の者へ伝わっていく。それこそが親鸞聖人の願いではないかと思った。真宗本廟は、親鸞聖人の願いそのもので、そこに集うすべてに願いをかけておられるのだと感じた。

私にかけられた願い



普段は足を踏み入れない宗務所の議場にて



お内仏のお給仕を学ぶ

大谷派の近現代史

「満州開教」と「満州別院」

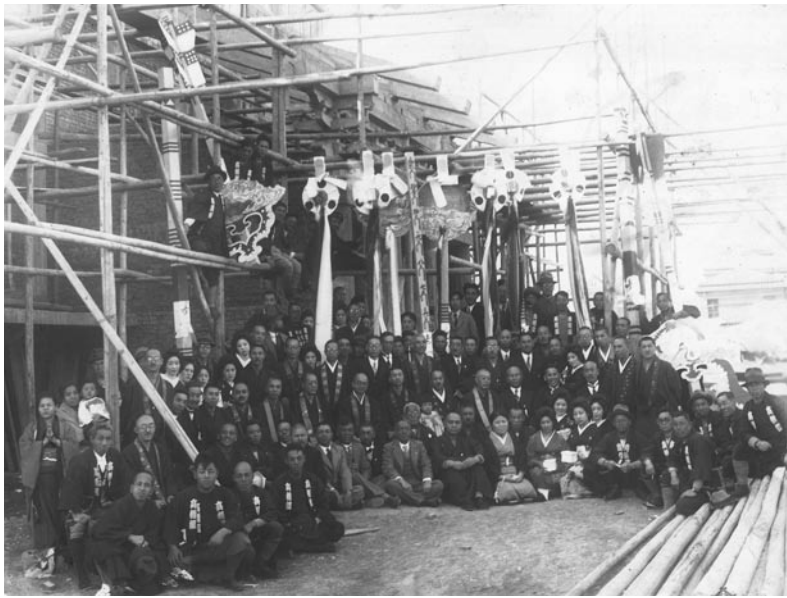
—新資料の提供を受けて

今年九月に、当時、「満州別院（新京別院）」の門信徒総代だった久野清太郎氏の孫にあたる久野明久氏（第二十一組竹雲院門徒）から「満州別院」に関する経典、写真、絵巻書などの資料提供がありました。今回その資料と併せ「満州別院」が大谷派の「満州開教」の中心を担ったことについて取り上げます。

※資料の一部は第二十五回平和展（二〇一四年三月十八日〜二十四日）でも紹介予定。

「大同」と「康徳」、あまりなじみがない言葉ですが、これは、「満州国」で用いられた元号です。現在の中国東北部に位置した「満州国」。もともと「満洲」と呼ばれていたこの土地に、「満州事変」を経て日本は「満州国」を一九三二年三月一日に建国しました。それ以降を「大同」の元年とし、一九三四年三月一日の帝国制度への移行に伴い「康徳」へと改元され、日本が敗戦し「満州国」が消滅する一九四五年八月十八日まで用いられました。今回紹介する「満州別院（新京別院）」は、まさにこの歴史と共にありました。建国から敗戦の間、大谷派の「満州開教」の中心を担った同院について、新資料の「満州別院写真」などとともに取り上げたいと思います。

「満洲国」の首都は、現在の吉林省長春市に置かれ「新京」と名付けられました。中心部は大同大街と呼ばれ、関東軍司令部（兼在「満州国」日本大使館）などの官公庁や商業ビルが立ち並んでいました。



竣工前の期待感が伝わる上棟式

この「大同大街」の一角に「新京別院」は建立され、「満洲開教監督部」が置かれたのです。一九三二年九月のことでした。「満州開教監督部」は、これら「満州」と「蒙古」地域の一円に設置された

四十四の寺院や布教所²と、開教使らの活動を統括する機関です。つまり「満州開教」の中心的役割を担ったのです。この機関はもともと、「大連別院」内に併設されていました。しかし「満州事変」の後、「奉天」（現在の瀋陽）に移りました。その後、首都が長春に決まると、一九一九年十月に開設されていた「長春布教所」に置かれました。一九三三年六月一日に「満州別院」と名称を新たに再出発したのです。

そして、一九三六年五月に本堂建築に着手しました。一年後の一九三七年五月に上棟し、翌年十月に竣工しました。庫裏と書院は本堂竣工の三か月前に完成しました。

本堂の設計は、帝国ホテルの旧本館「ライト館」（一九二三年、中央玄関は明治村に移築）を設計したフランク・ロイド・ライトの弟子の一人である南信（みなみまこと）の建築事務所が請け負いました。十四間四方で棟高六十六尺（約二十メートル）、銅版屋根の入母屋造りで、冬場にはマイナス二十度にもなる厳寒の地に相応しい、強固な鉄筋コンクリートを用いました。総地下室を有する建築総面積四六九・一七坪の巨大な本堂でした。

門徒戸数は八五〇戸で、約二五〇〇人の門信徒がいました。毎月の定例布教に加え、婦人会（東本願寺満州別院智徳婦人会）の例会などで法話会を行っていました。幼稚園を併設し、日曜学校の開設、女子青年家庭講座の開設、さらには宗教書籍を一般開放していました。

そして、今回紹介する資料は、同別院の門信徒総代の一人をつとめた久野清太郎さんが所有していた写真です。名古屋出身の清太郎さんは、二十三歳（一九〇五年）で日露戦争に出征し、中国を知ったことを手がかりにして二十五歳で「満州」へ渡りました。大変貧しい生活でしたが、「満鉄（南満州鉄道株式会社）

の仕事に関わりながら徐々に資金を蓄え、金融や不動産業、料理店などを経営し財を成したそうです。

門信徒総代として「満州別院」を支えた清太郎さんでしたが、敗戦によって全てを失い帰国しました。そして、「浄土三部経」と数枚の写真が残りました。その貴重な資料を、ご令孫の久野明久さんが名古屋別院参拝の折り、教化センターにお持ちいただいたことから、紙上で紹介することが叶いました。

「浄土三部経」は大谷光暢法主が一九三四年十月三十日に巡教した際、信徒総代としての功績を認められたため下付されたものです。箱裏書からは、「満州国」の皇帝、愛新覺羅溥儀が同席しており、満州開教総監だった宮谷法合によって贈られたことが分かります。また、絵像本尊の脇に「地鎮祭 東本願寺満州別院」と書かれた立札の見える写真は、文字通り地鎮祭の写真と思われる。そして、上棟式と思われる写真も残されました。竣工前の期待感が伝わる写真は、これまで知られておらず、いずれも大変貴重な写真です。



本尊の脇に「地鎮祭 東本願寺満州別院」と書かれた立札が見える

「平和展」の活動として、教化センター

差別と私 ②

十二月二日

職員研修会

前号でお伝えしたとおり、教化センターでは差別問題の本質についての考察を深める取り組みを模索している。今回は大谷派の近現代史を担当する新野研究員から、「差別と私」というテーマのもと、私たちが差別をしてしまう根源についての問題提起がなされた。前号に引き続き教区内内外の皆さま方に報告いたします。

私はこの七月より「大谷派の近現代史」を担当する研究員を拝命いたしました。これまで、十年以上にわたって、平和展スタッフの一人として大谷派と過去の戦争にまつわる事実を確認し、現代を生きる私たちの課題を共に学んでまいりました。最近になって気づかされたことは、「平和展」での学びの本質は、過去の戦争責任の追及にないということ。それは、過去の事実を通じて存在する私たちの立ち位置を確認し、現代に生きる私自身の課題として受け止めていくことにあります。前号のセンタージャーナルで、荒山淳主幹から「差別と私」というテーマのもと、「繰り返し差別問題を学び自らの課題とすることが必要である」というご説明がありました。この決意は、私個人に対しての問題提起も伴っています。「平和展」の学習の場で起こった差別言辞に深くお詫びを申し上げるとともに、差別の原点を確認しておきたいと思えます。



分析すること。に比べて、特殊な能力や専門性は特に必要ありません。その時間と労力を必要とするだけです。

その意味では、誰でも行い易い学びと言えます。けれども、それがなかなか難しいのです。分厚い辞書を引くことは少なくなり、データベースやネット検索などによって便利になっていくもの、いざ調べるとなると、めんどろになったりして、なかなかできないものです。だからこそ、「平和展」は、自身で調べたのか、それとも調べなかつたのか、まずそれが問われることになるのです。

差別の原点

面倒な作業を好んで行う人は、それほど多くないと思います。根気のない私は特に苦手なことです。面倒であっても実りが多いのであれば作業も苦になりませんが、ほとんどの場合がそうではありません。そんな時、いつも思うのは、面倒な作業を誰か代わってくれないか？という思いです。嫌なことや苦手なことを引き受けてくれるよう、都合の良い存在を探したくなるのです。この、「自分がしたくないことを他人にやらせる」という発想の中に、差別の原点が潜んでいるのです。

学びは対等な関係性

面倒な作業や、自分がやりたくないことを他人に押し付けようとした場合、その多くが立場でモノを語ります。あたかも上司と部下の関係のように、命令することもあるでしょう。インドで不浄とされている仕事をアウトカーストに担わせる姿に差別性を感じながらも、自分が押し付ける側に立つことの差別性には気づこうとしない、そんな構図をどこかで持ち続けているのだと思います。しかし、本来的に、学ぶという行為を前にするならば、学びのサンガは対等な関係にあります。「共に学ぶ」という関係性においては、他人に押し付けるとい

う発想はなじまないのです。だからこそ、「押し付ける」という行為に至るためには、何らかの「決めつけ」や「レッテル貼り」を行い、他人を見下すような差別性が生じるのです。

高校で宗教を伝える

ところで、私は日ごろ、名古屋大谷高校で宗教の授業を担当しているのですが、授業の始まりに三帰依文をクラス全員で唱えています。その日の日直さんが導師を務めます。進んで唱える生徒もいますがそうでない生徒もいます。三帰依文に意義を見出せなかったり、人前で合掌することに恥ずかしさを覚えているのかもしれない。嫌だと思っただけの根拠を持つまでもなく、ただ漠然と嫌だと思っただけの生徒も多いためです。しかし、理由はどうあれ、次に考えることは大抵決まっています。「誰か代わってくれないかな」です。私も人前で話したりする時、緊張のあまり逃げ出してしまいたくなることもあるので、彼らの気持ちが良くわかるのです。

誰が念仏申すのか

このように、自分にとって嫌なことの代理を探すという行為は、自分よりも弱い者や、自分の言うことを聞く者を探す行為に他なりません。そこに差別が生じるのです。私たち真宗門徒の生き方の中心には、お念仏があります。例えば、こんなことは想像の世界ですが、お念仏の教えに生きていながらも、念仏申すことに、面倒さを感じたならば、他人に念仏申すことを任せられるのでしょうか。他人に申させたお念仏で、私が救われるのでしょうか。ましてや、親鸞聖人が念仏申すことを他人に任せられたことがあったでしょうか。「歎異抄」に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人が為なりけり」とあるように、弥陀の本願は、ほかの誰でもない、念仏申す一人への願ひなのです。私の立ち位置は、お念仏を申すことに他なりません。お念仏に生きるサンガの一人として、差別問題を私の課題として受け止めるながら歩みを進めることが与えられているのです。(研究員 新野和暢)

で寺院に残された資料などを収集していますが、今回のように、門信徒の方からの資料紹介もあります。寺院の歴史は門信徒との歴史でもあることをあらためて教えていただきました。

ところで、敗戦によって「満州別院」を放棄した後、どのような歴史的経緯を辿ったのでしょうか。長春に限らず、植民地や占領地に作られた日本に関する建築物の多くは廃棄されました。北京別院なども残りませんでした。しかし、「満州別院」の建物は現在も残されています。中国政府によって歴史的な建造物として保存されているのです。ただ、内部がどうなっているのかは不明です。今後の調査に期待したいところですが、少なくともご本尊を安置する開法の間ではありません。日本人の動静と共に歩んだ「満州別院」での「開教」は、残念ながら、教えがその地に残ることはありませんでした。建物が残されていても、真宗の教えを学ぶ道場ではないのです。そのことに思いを致すとき、当時の方々のご苦労と願いを私たちがどう受け止めるのか、課題を与えられているようではありません。(研究員 新野和暢)

- 1 「満洲」とは、もともと地域を表す言葉です。ここでは「満州国」と峻別しておきます。
- 2 「満洲開教記要」(一九四〇年三月)。
- 3 一九二九年四月十七日からこの時まで大連別院が「満州別院」と呼ばれていました。長春布教所が「満州別院」となったのは、「満洲開教」の中心地ゆえの名称と思われまます。
- 4 注2に同じ。

第25回 平和展

とき ● 3月18日(火) ~ 24日(月)
10時 ~ 18時
※18日は午前11時から開会式
(開会式後、ご観覧いただけます)
ところ ● 名古屋教務所1階 議事室
(別院境内東側)

真宗教化センターの開設に向けて 各機関・個人が連携・協調・共同していく ネットワークの構築を模索

去る11月5日、首都圏教化推進本部の置かれている真宗会館(東京都練馬区)に於いて、真宗教化センター準備事務局、首都圏教化推進本部、大阪教区教化センター、名古屋教区教化センターの関係者による協議会が行われた。

現在、宗派では、新たな教化機構である真宗教化センターの設置に向けての準備が進められている。設置に向けて具体的な事務を掌る準備事務局では、宗務所・教務所・組・寺院といったタテのつながりに加え、首都圏教化推進本部や各教区の教化センターなどのヨコのつながり、さらには関係学校や教学・教化に携わる各種団体・個人を含めた様々なつながりが縦横無尽につながりあう場・機構の構築を模索している。

今回は、首都圏開教の現況及び課題を共有することを通して、大阪・名古屋などの大都市を抱える教区との連携と、真宗教化センターが果たす役割について意見が交わされた。

なお、10月2日にも名古屋教務所を会場に、真宗教化センター・大阪・名古屋教区教化センター関係者による懇談会が開かれており今回で2回目。今後も継続した協議が予定されている。

現代社会と真宗教化 報告

自死者追悼法要「いのちの日 いのちの時間」

主催 いのちに向き合う宗教者の会 後援 名古屋教区教化センター

去る12月4日、自死者を追悼し、自死遺族と宗教者が共にいのちの尊厳に向き合う時を過ごすことを願って「いのちの日 いのちの時間」が、名古屋別院対面所にて行われた。

同法要は、宗教・宗派を超えて集まった僧侶ら(いのちに向き合う宗教者の会)の呼びかけにより、教化センター後援、名古屋別院の協力のもと、自死によって大切な方を亡くされた遺族らと共に厳修され、今年で5回目。

参拝者からは、「親戚が集まる自宅での法要では、様々な気遣いや接待に追われ、故人に向き合えない。このような場はとて有り難い」や、「故人が亡くなった当初は、借金や様々な問題に対応しなければならず、葬儀や法要も流れ作業だった。こうして、1年に1度、自死遺族のことを理解しようとしてくれる方たちと仏さまに向えることがうれしい」などの声が聞かれた。

自死遺族を取り巻く偏見や社会的孤立が存在する中、このような「場」が求められている現実を思い知らされる。同法要に参加できなかった遺族にも思いを馳せつつ、寺院の日頃の在り方が問い返された。



INFORMATION

教化センター日報 ■2013年9月 ～2013年11月

- 9月1日 研究業務「平和展」学習会
- 6日 研究生・実習「真宗門徒講座(真宗門徒のくらしとつとめ⑤)」
- 9日 研究生・実習「真宗本廟日帰り参拝 下見」
- 11日 研究生・学習会「『聞』校正作業、真宗本廟日帰り参拝 事前学習」

- 18日 研究生・学習会「真宗本廟日帰り参拝 事前学習」
- 25日 研究生・教化研修「真宗儀式の教相(第12回)」(竹橋太氏)
- 30日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援
- 10月1日 研究業務「平和展」学習会
- 4日 研究生・実習「真宗本廟日帰り参拝」参加
- 7日 研究業務「平和展」学習会
- 11日 研究生・教化研修「解放運動推進要員研修・現地学習」参加
- 18日 研究生・教化研修「第1回伝道スタッフ養成講座」参加
- 21日 研究業務「平和展」学習会
- 25日 研究生・実習「真宗門徒講座(真宗

- 門徒のくらしとつとめ⑥)」
- 11月1日 研究生・学習会「真宗門徒講座 事前学習①」
- 8日 研究生・学習会「真宗門徒講座 事前学習②」
- 11日 研究業務「平和展」学習会
- 13日 HP「お東ネット」会議
- 14日 研究業務「お講調査」美濃尾張五日講・竹村家
- 15日 研究生・実習「真宗門徒講座(真宗門徒のくらしとつとめ⑦)」
- 18日 研究業務「平和展」学習会
- 19日 研究業務「お講調査」美濃尾張五日講・本住寺
- 28日 研究業務「お講調査」美濃尾張五日講・竹村家
- 29日 研究生・教化研修「第2回伝道スタッフ養成講座」参加

お知らせ

●事務休暇について

- ・冬期休暇：2013年12月28日(土)～2014年1月6日(月)
- ・17時閉館：2014年1月7日(火)
- ・臨時閉館(職員研修のため)：2014年2月17日(月)、18日(火)

●図書整理に伴うお知らせとお願い

- ・図書整理(図書・視聴覚教材及び資料の貸出停止期間)：2014年1月27日(月)～2月10日(月)
※上記期間中は、教化センターの蔵書、視聴覚教材及び資料の整理を行いますので、貸出を停止させていただきます。
- ・書籍をご返却ください
図書整理を行うため、お手元に借受中の書籍及び視聴覚教材がございましたら1月25日(土)までにご返却ください。

《編集子雑感》

誰のための教えか…。私たちは、たまにお話をさせていただく機会をいただくことがある。慣れた方なら違うのかもしれないが、そんな機会がほぼ無い私にとっては一大事。ひと月ほど前から少しずつ準備をし始め、残り一週間ともなると食事が喉を通り辛くなる。

そんなこともあり、私はいつも話をする素材を探しながら本を読んだり、話を聞いたり、思いついたらメモをしたりする。なにかおかしい。私「一人がため」なる教えを聞かせていただいているのではなかったか。ただ、そういう機会がないと勉強することもなくなってしまふような気がする。(S)

公開講座のご案内 (聴講に費用はかかりません。お気軽にご参加ください。)

◆研究生教化研修

「真宗儀式の教相(第13回)」 ※僧籍者対象

- 講師 竹橋 太氏 (本廟部出仕) 期日 2014年4月8日(火)
時間 午後4時30分～6時 会場 名古屋教務所1階 議事堂

■教化センター

〈開館〉

- 月～金曜日 10:00～21:00
- 土曜日 10:00～13:00
(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉

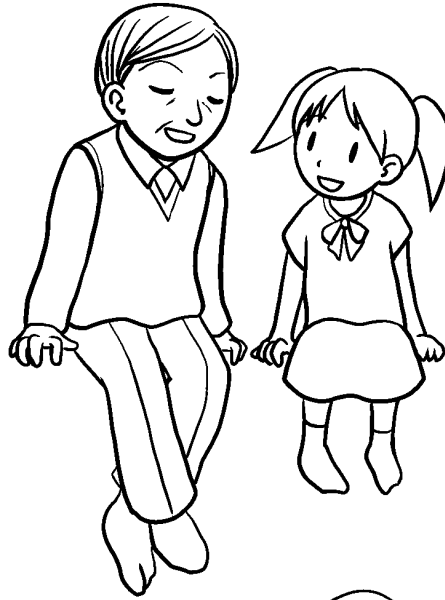
- 書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～

イラストカッター集

寺報やチラシなどにお使いください。

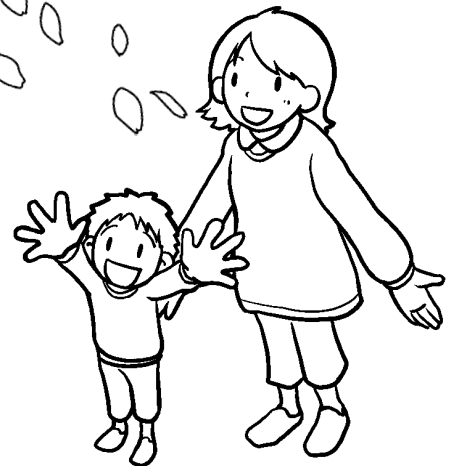
◆座ってお話①



◆絵本



◆桜

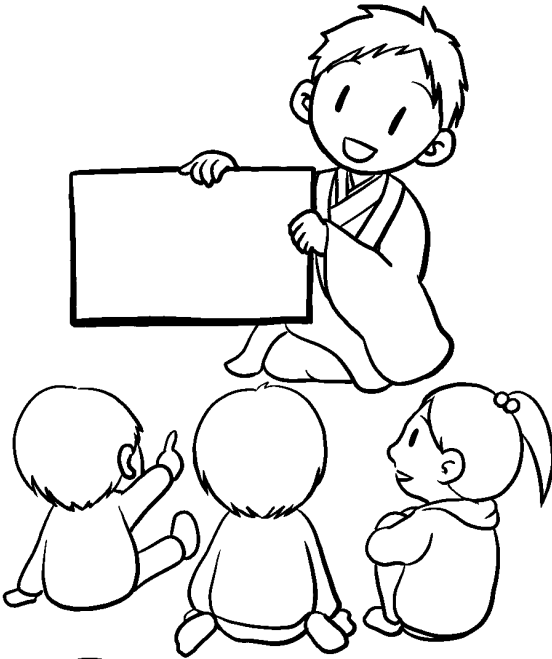


◆みあげる

◆座ってお話②



◆かみしばい



◆渡す・受ける



◆かみしばいパーツ



◆渡す・受けるパーツ

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。